

Spontaneous trait transference: Communicators take on the qualities they describe in others.

自発的特性転移: 伝達者は他者を記述した性質を身につける

Skowronski, J. J., Carlston, D. E., Mae, L., and Crawford M. T. (1998). JPSP, 87(4), 837-848.

Rep. 小森めぐみ¹

概要

- ・ 自発的特性転移は、伝達者が別の人を記述するのに用いたまさにその特性を所有していると知覚されてしまうことだ。研究1では、伝達者は、自分が別の人を記述するのに用いた特徴と連合されてしまい、それは一定時間維持されることが示された。研究2ではこの連合が伝達者の特性特有の形で印象に影響することが示された。研究4ではもっと自然な刺激が用いられ、この現象が論理的な帰属ではなく、心の働きを必要としない連合を反映したものであることが示された。これらの研究は、自発的特性転移は社会的知覚や相互作用において今までわかっていなかった役割をたしかに果たしていることを示している。
- ・ 他の人について話すという機会はよくある（例. 政治化が対立候補の悪事を暴く、批評家が芸術家の批評をする、人の失敗の噂話）。論理的にいえばその話に影響を受けるのは話題となっている人の印象だけ。
- ・ しかし、最近の研究では(Carlston, Skowronski, & Parks, 1995, study4)、そのようなコミュニケーションは話をしている本人の印象にも影響してしまうことがわかっている
- ・ 本研究では、特性が無関係のターゲットに手にしてしまうことを、自発的特性転移と呼ぶ。自発的特性転移は常識に反するし、帰属理論(Jones & Davis, ; Kelly, 1967)とも矛盾するが、以下に述べる段階を経て起きる。

自発的特性転移モデル(A model of spontaneous trait transference)

- ・ 自発的特性転移は3段階のプロセスを経ている（図1参照）
 - ① 知覚者が行動を解釈、符号化する際に特性概念が活性化する（特性の活性化）
 - ② 知覚者は活性化された特性と行動を伝達した伝達者とを連合させる（特性の連合）
 - ③ 一度特性の連合が形成されると、その連合が伝達者の印象にも影響（特性の影響）
- ・ このプロセスを直接支持する研究はないものの、間接的に支持する社会心理学の知見は多い

特性の活性化

- ・ 第一段階である特性の活性化を支持する知見は、文章理解の研究と対人知覚の研究。
 - 文章読解の際には、話の要点や意味が抽出される(Bower & Morrow, 1990)
 - 行動記述は特性概念を活性化する(Winter & Uleman, 1984; Carlston & Skowronski, 1994; Gilbert, Pelham, & Krull, 1988; Trope, 1986; Whitney, Waring, & Zingmark, 1992)

¹ 一橋大学社会学研究科

特性の連合

- 社会的文脈において、偶発的な連合が大きな役割を果たすことは、いくつかの研究で明らか
 - 重要他者と、その人に似た見知らぬ他者との連合によるフロイト流転移 (Andersen, Glassmann, Chan, and Cole(1995))
 - 有名人や成功した人と自分を連合させることで印象管理をはかる栄光浴 (Cialdini & deNicholas, 1989)
 - 悪いことを知らせる人とネガティブ感情を連合させる killing-the-messenger 効果 (Manis, Cornell, Moore, & Jeffrey, 1974)
- 連合は行為者の行動の特性に限られるという主張 (Winter & Uleman, 1984) は、一見矛盾するように見えるが (Bassili, 1989; Uleman, Moskowitz, Roman & Rhee, 1993; Whitney, Davis, & Waring, 1994)、伝達者とその人が伝達する別の人の行動も連合することが示されている (Carston et al., 1995, study4)。

特性の影響

- 伝達者と特性の連合が伝達者の印象に影響することを直接調べた研究はないが、類似の現象は検討されており、この主張とも矛盾しない。
 - 冒頭の見出しで作られた innuendo (連合のようなもの) は、たとえそれが望ましくなくても、その後の印象に影響を与える (Wegner, Wenzlaff, Kerker, and Beattie, 1981)。
 - 栄光浴の研究 (Cialdini & deNicholas, 1989)
- なぜこのような望ましくない特性の影響がでてしまうかという点、知覚者は伝達者と特性の連合を覚えていられるが、その連合が伝達者以外についてのものであることを忘れてしまうから。
 - 人は行動を思い出すときに、それが自分自身の経験か読んだ経験かを混同しがち (e. g., Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993)
 - 記憶の再構築研究によると、人は自分の記憶の詳細と他人の記憶の詳細を混同しがち (Beta, Skowronski, & Ostrom, 1996; Loftus, 1975)
 - スリーパー効果 (Pratkanis, Greenwald, Leippe, & Baumgardner, 1988)。説得メッセージの源泉は忘れ去られやすいが、内容だけは残っている

本研究の概要

- 本研究は自発的特性転移についての4つの実験から成っており、さきほどのモデルで述べたプロセスを検討
 - 研究1：伝達者が他者について述べた特性と連合されるか、その連合が長続きするかを検討
 - 研究2：連合が伝達者の印象に影響を与えるか、その効果における特性の特殊性を検討
 - 研究3：特性推論に必要な合理的な基盤を除去した上で印象への影響、プロセスを検討
 - 研究4：より現実場面に近い形での自発的特性転移の検討と、媒介要因の指摘

研究1：自発的特性転移における特性の連合

- ・ 研究1では、Carston et al(1995, study4)の結果の追試を行って、伝達者と伝達者が伝える別の人の特性とが連合するかを検討する。
- ・ それに加えてその連合が一時的なものなのか、比較的長い時間もつものなのかを検討する
- ・ 実験には Carlston and Skowronski (1994)の再学習パラダイムを使用する。
 - 連合の再学習は新しい連合の学習よりも簡単
 - 参加者はまず伝達者が友人について述べている場面に接触し、そこで伝達者と特性の連合が形成されるはず
 - 次に、参加者は伝達者（写真）と特性のペアを複数学習する。そのうちのいくつかは第一フェイズで見たものに対応。最後にそのペアを思い出す。第一フェイズで伝達者と特性の連合ができていれば、対応するペアはそうでないものよりも思い出されやすいはず
 - さらに、この連合は2日の間隔をあけたあとでも持続していると予想される

方法

実験参加者：大学生145名が講義の追加点と引き換えに実験に参加

手続き：

教示フェイズ

参加者は、写真の人物が友人について述べている場面を呈示された。伝達者が別の人について述べていることを強調するために、伝達者と別の人の性別は異なるものにされた（たとえば男性が女性について述べる）。

- 馴染み条件：写真と記述は、後でやることと関係があるので、目を通してなじむよう教示
- 分離条件：自発的特性転移が参加者が注意深く刺激を見た場合も生じるかを検討するために入れられた条件。参加者は事前に自発的特性転移についての簡単な説明を受け、それが生じないようにするよう教示された

接触フェイズ

参加者は29ページからなる冊子を配られた。各ページには伝達者（写真で呈示）が知り合いについて述べている短い記述が呈示された。写真は州外の大学でとった学生の写真で、記述は Carlston and Skowronski (1994)が用いたものを使用。

- 冊子の内容：冊子は2種類あって、それぞれに異なる組み合わせが12対かかれていた。その他、特性とは関係のなさそうなフィラー記述と写真のくみあわせが、冊子の最初と最後、それから間に12対ちりばめられていた。
- 参加者はテープの教示にしたがって8秒ごとにページをめくって刺激を読んだ。

その後参加者が元の記述を思い出すことができないよう、類似のくみあわせが15分間に60対呈示された。その後参加者は同セッション内または2日あとに、2分間のフィラータスクを行った。

学習フェイズ

参加者は写真の人物と特性語の組み合わせ30対を呈示され、それを学習した。参加者はテープの指示に従って各6秒で組み合わせを記憶した。

- 再学習試行：12対は接触フェイズで出現したものと対応

- 統制試行：残り 12 対は対応していなかった
- 一つの冊子で再学習試行になったものは、もう一つの冊子では統制試行になっていた
その後参加者は4分間のフィラー課題を行った。

手がかり再生フェイズ

参加者は学習課題で使われた写真を呈示され、どの特性語が組み合わせられていたかを思い出した。タイムラグの影響を除くために、再学習試行の写真は学習課題のときと同じ順に呈示されたが、統制試行の写真はその間に順序をばらばらにして入れられた。

参加者は各写真に 15 秒与えられ、特性語を再生した。思い出せなければ当てずっぽうも許された。

結果

- ・ 手がかり再生フェイズでの各参加者の正当数が 2 (冊子の種類 AorB) × 2 (教示：馴染み or 分離) × 2 (遅延：直後 or 2 日後) × 2 (試行：再学習 or 統制) の ANOVA にかけて。
- ・ 試行の主効果が有意で ($F(1, 137)=19.41, p<.001$)
 - 再学習試行 (6.45, 54%) は統制試行 (5.69, 47%) よりも多く再生されていた。
 - 伝達者は他者の行動を記述する際、そこから推論される特性と連合されることが示された
- ・ 遅延の主効果は有意でなく ($F(1, 137)=2.59, p>.10$)、自発的特性転移は時間の経過があっても強いままということがわかった
- ・ これは教示 × 試行 × 遅延の交互作用に制限されていた ($F(1, 137)=7.44, p<.008$)。
 - 自発的特性転移が維持されたのは馴染み教示条件の場合のみで、分離教示条件の場合には維持されていなかった。
 - 馴染み教示条件では 2 日後 (再学習試行 $M=6.80$, 統制試行 $M=5.83$) も試行間に差があり直後 (再学習試行 $M=6.17$, 統制試行 $M=5.54$) よりもやや強かった
 - 分離条件の場合は直後にあった差 (再学習試行 $M=6.79$, 統制試行 $M=5.34$) が 2 日後にはなくなっていた (再学習試行 $M=6.03$, 統制試行 $M=6.05$)。

考察

- ・ 研究 1 では、Carlston et al., (1995 study 4) の追試に成功。伝達者は他者の行動記述で示される特性と連合されていた。
- ・ さらに、自発的特性転移はそれを避けるよう指示されなければ持続することがわかった。そのような指示を受けても直後には自発的特性転移は起きていた。
- ・ つまり、自発的特性転移は頑健かつ持続的
- ・ 研究 1 では特性活性化と特性連合の二つの段階が支持された。しかし、この連合が印象形成に影響するだろうか。研究 2 ではこの点を検討

研究 2：自発的特性転移における特性の影響

- ・ 自発的特性転移の連合は、伝達者の印象に影響を与えるのか？ 著者達のモデルの第三段階では特性の連合が不適当な印象形成をみちびくと主張している。

- ・ 人は不適當な情報に抵抗することができるけれど、そのような動機や能力がない場合もある (Devine, 1989; Gilbert, Pelham, & Krull, 1988)。自発的特性転移にもこれと同じことが言えるだろう。
- ・ 研究2では自発的特性転移が伝達された特性に特定の生じるかも検討。自発的特性転移は事前の連合がもとで行われるはずなので、その特性次元のみで見られると考えられる。対立仮説としては killing-the-messenger 効果のように、ネガティブな知らせをもってくる人はネガティブティというもっと大きな次元で評価されると考えられる。
- ・ 研究2では自発的特性転移が参加者が記述とターゲットの關係に混乱するかどうかによって違うかを検討する。一部の記述を自分についてのものにして、メッセージが誰についてのものかを尋ねることでこれは検討可能。これによって自発的特性転移と自発的特性推論の効果の大きさを比較することもできる。

方法

実験参加者：オハイオ州立大学の学生 47 名が講義の追加点と引き換えに実験に参加。

手続き：学習フェイズ、再学習フェイズのかわりに特性評定が行われた。接触フェイズと妨害課題は研究1と同じ。

教示：写真にうつった伝達者は自分か友達について述べていると教示されたほかは、研究1のなじみ条件と同じ。

接触フェイズ

冊子は研究1と同様の A, B バージョンに加え、自己記述か他者記述かの2バージョン (1, 2 バージョン) が掛け合わされた。

特性評定フェイズ

接触フェイズの2日後、参加者は1パターンのランダムな順序で呈示された24名の写真人物の特性を評定した。

- 再学習試行：12名は事前に参加者に呈示された人物
- 統制試行：残り12名は初めてみる人物
- ある冊子で統制試行だった人物は、別の冊子では再学習試行だった。
- それぞれの冊子の記述は自己/友人記述が半々で、別の冊子ではそれが入れ替わっていた。

参加者はそれぞれの呈示された3つの特性のそれぞれをどの程度備えていると思うかを1. 全く備えていない～7. とても備えているの単極7件法で評定した。

- 特性：記述に対応する特性、評価次元では一致する特性、評価次元が不一致の特性の3つ

4分間のフィラー課題の後、写真が別の順序で再び呈示され、参加者はその人物が自分について述べていたか、友人について述べていたかを回答。

結果

特性評定の分析

- ・ 対応する特性の分析：まず、自発的特性転移が生じていたかが検討された。友人についての記述である再学習試行6名分と統制試行6名分の評定の平均値が試行×冊子バージョン (AorB) × 冊子バージョン (1or2) の反復測定ANOVAにかけられた。
- ・ 試行の主効果が見られ ($F(1, 43) = 5.82, p < .03$)、再学習試行は統制試行よりも特性をもっている

と評定されていた (図2左側参照)。

- ・ 次に、上記の分析に記述のタイプ (自己 or 友人) を加えた分析を行った (自己についての記述の平均値も従属測度に含めた)。自発的特性推論は論理的な帰属行動なので、こちらの効果サイズの方がおおきいことが予測された。
- ・ 予想通り試行×記述タイプの交互作用が見られ ($F(1, 43)=6.98, p<.02$)、(各要因の主効果も有意) 自発的特性推論の効果サイズ ($d=.74$) は自発的特性転移の効果サイズ ($d=.35$) よりも大きかった。

対応しない特性の分析

- ・ 自発的特性転移は対応する特性のみに起きるものかを検討するために、対応しない特性も同様に分析されたが、有意な結果は見られなかった (最大でも $F(1, 43)=1.66, p>.20$)。

ターゲットの同定

- ・ 自発的特性転移は、伝達者が他人のことについて話しているときに、自分のことを話していたと誤って思い出すことが原因かもしれない。
- ・ 参加者は平均して友人記述のうち 45.8% を自己記述とまちがえた。エラー率が高かったため、階層的統合被験者内回帰分析 (hierarchical pooled within-subject regression, see Cohen & Cohen, 1983) を行って、再生の種類を 3 水準の要因 (正答、誤答、統制) とした。
- ・ その結果、誤答していても ($M=4.23$) 正答していても ($M=4.18$)、統制の場合より ($M=3.93$) 評定は極端だった ($F(2, 515)=3.46, p<.04$)。5%水準で行われた事後検定の結果、最初の 2 つは残り 1 つと有意に差があったが、2 つ同士に差は見られなかった。
- ・ よって自発的特性転移は混同が原因ではないことが示された。

考察

- ・ 研究 2 では、伝達者が他者について述べることで、伝達者自身の特性評定に影響することが示された。
- ・ さらに、自発的特性転移は特性特定のことで (これは伝達者への一般的な評価的反応では説明できない)、参加者が記述内容のターゲットを混同しているために生じるわけではないこと、自発的特性推論よりは効果の弱いものであることが示された。この結果は、自発的特性転移がロジカルな帰属プロセスでは説明できないことを示している。
- ・ 研究 2 の結果は著者達のモデルでの説明がもっともあっている。研究 3 では自発的特性転移のプロセスにさらに注目し、ロジカルな帰属プロセスとは異なる、連合プロセスに注目して検討

研究 3 : 自発的特性転移における単純連合

- ・ 研究 2 だけでは自発的特性転移からロジカルな帰属プロセスの影響を排除しきれない
 - 伝達者が自分に似た友人について話していると仮定してしまっているのかもしれない
 - 記述された特性が自分に備わっているため、その行為を暗黙的に承認しているのかもしれない
- ・ 研究 3 では推論のロジカルな基盤となるものを最小限に制限。参加者は記述が写真の人物の言葉ではなく、ランダムに組み合わせられたものと前もって告げられた。

- ・ もしも自発的特性転移がロジカルな推論プロセスをたどっているのであれば、この条件では転移は起きないはず。

方法

実験参加者：オハイオ大学学生 40 名。教示に従わなかった 1 名を除外。心理学の追加点と引き換えに実験に参加。

手続き：研究 3 の手続きは以下を除いてほぼ研究 2 に同じ。

参加者は、記述は写真人物が行ったものではなく、ランダムに組み合わせられたものと告げられた。研究 2 と同様に一人称 or 三人称が使われた。人物と記述の連合をきちんと作ってもらうために、参加者は組みあわせを暗記するよう教示された。

結果

対応する特性：

- ・ 再学習試行と統制試行の特性評定値が従属測定。研究 2 に人称の要因をいれた試行×冊子バージョン(AorB)×冊子バージョン(1or2)×人称(一人称 or 三人称)の反復測定ANOVA にかけて。これは、どの人称が使われていても連合プロセスを反映したものと仮定できるため。
- ・ 試行の主効果が見られ($F(1, 35)=12.97, p<.001$)、再学習試行($M=4.36$)は統制試行(4.05)よりも特性をもっていると評定されていた。これは一人称($d=.42$)の場合も三人称($d=.44$)の場合も効果の大きさは変わらなかった(記述と人称の交互作用は $F<1$, 図 3 参照)。

対応しない特性

- ・ 対応しない特性についての結果は研究 2 と同じ。

考察

- ・ 研究 3 の結果は、ロジカルな推論基盤がない状況でも自発的特性転移が生じることを示している。
- ・ 研究 3 で見られた人称別の自発的特性転移の結果を研究 2 の結果と比較すると、研究 3 の結果($d=.42, .44$)は研究 2 の一人称($d=.74$)と三人称の結果($d=.35$)の中間の効果サイズ
- ・ 研究 3 で用いられた手続きは参加者が①写真人物は自分と類似の特性をもつ友人について述べた②暗黙のうちに支持していると仮定した、という代替説明を排除しており、また、対応しない特性については差が見られていないことから、より全体的な説明という代替説明も却下される。
- ・ よって、研究 3 の結果は図 1 の 3 段階モデルを支持するものである。

研究 4：現実的な刺激を使った自発的特性転移

- ・ 自発的特性転移が日常生活でも生じているということは信じがたい。実験という特殊な状況で、写真と記述のような実験者側が作成することが容易な刺激に対してのみ起きるのかもしれない。
- ・ 現実場面では提供される情報の種類や量はもっと多く(例えば声)、より精緻な処理がされるかも

しれない。しかし、これまでの研究では自発的特性転移は頑健に見られている。

- ・ 研究4では映像というより自然な方法を用いて、自発的特性転移を検討する。
- ・ 研究4の第二の目的は、ロジカルな推論を可能にする要因の影響が見られないかを検討すること。
 - ここでは参加者の記憶違い、特性の承認、場面の信憑性という要因の影響を検討する。
 - 自発的特性転移が連合によってのみ生じていれば、これらの要因の影響は見られないはず
- ・ また、知覚者が意識的に特性推論を行うことの影響も検討する。自発的特性推論のほうは、知覚者の目的に影響することが知られているが(see Uleman & Moskowitz, 1994)、自発的特性転移は単純な連合プロセスにより生じるため、この影響は見られないと考えられる。

方法

実験参加者：オハイオ大学ニューマーク校の学生 60 名。心理学の追加点と引き換えに実験に参加。

実験刺激：

- ・ 8名の俳優がそれぞれ4場面（自分 or 友人、ポジティブ or ネガティブ）に登場。各場面は1.5～2分で、カメラには映っていないインタビュアーの質問に答えるという形式だった。
 - これまでの研究と同様に、友人について話す場合は友人の性別は伝達者とは違った。
 - 伝達者はなるべくニュートラルな態度をとり、特性を非難も賞賛もしないように話した。プリテストの結果もこれを支持。
- ・ 12 場面を含む4種類のテープが作成された。12 場面の中には上記の4つの場面が2種類ずつカウンターバランスがとれるような順で収録され、さらに特性推論ができないようなフィラー4種類が1, 4, 8, 12 番目に入っていた。
- ・ ビデオで呈示できる場面の数は冊子のときよりもかなり少なくなるため、統制試行は要因から抜かれた。
- ・ 従属尺度は両極の特性形容詞尺度で、伝達者がポジティブ内容に言及した場合にポジティブ、ネガティブな内容に言及した場合にネガティブに判断されていれば、自発的特性転移が生じていることとなる。

手続き：

教示フェイズ：参加者は、これから登場人物が自分または友人について語っているビデオテープを見せられようとして教示された。

- 馴染み条件：インタビューの形式になれるよう教示
- 印象形成条件：伝達者をあらわすのにもっともふさわしい特性形容詞を記録する教示
- 信憑性条件：インタビューが本物か演じられたものかを考えるよう教示。最後に回答。

特性評定 2日後、参加者は6種類（対応あり・対応なし評価一致、対応なし評価不一致）の7件法の両極尺度で伝達者の特性を判断。特性の順序はカウンターバランスされた

ターゲット同定と信憑性判断 研究2と同様、参加者は伝達者が自分と友達のどちらの情報に言及したかを1. 絶対自分のことを言った～6. 絶対友達のことを言ったの6件法で答えた。そして、インタビューの信憑性について1. 絶対うそ～6. 絶対本当の6件法でそれぞれに回答した。

結果

対応する特性

- ・ 特性評定に対してバイレンス (ポジティブ or ネガティブ) × 教示 (馴染み or 印象形成 or 信憑性) × テープの種類 (混合計画) の ANOVA を行った。その結果、バイレンスの主効果が見られ ($F(1, 48) = 6.63, p < .02$, 図 4 左側)、教示との交互作用は有意ではなかった ($F(2, 47) < 1$, ns.)。これは、目標に関係なく自発的特性転移は生じていることを意味する。
- ・ 上記の分析に記述タイプ (自分 or 友人) を入れた ANOVA を行ったところ、バイレンス × タイプの交互作用が有意だった ($F(1, 47) = 55.95, p < .001$)。これは自発的特性推論のほうが自発的特性転移よりも大きいことを意味している。また、教示 × バイレンス × タイプの交互作用も弱いながらも見られており ($F(2, 47) = 2.97, p < .07$)、自発的特性転移の場合 (つまり友人の場合) は目標の影響は見られなかったが、自発的特性推論の場合 (つまり自分の場合) には目標の有意差が見られていた ($F(2, 48) = 6.64, p < .01$)。信憑性条件の自発的特性推論 (ポジ $M = 4.43$ ネガ $M = 2.95$) は、印象形成条件 (ポジ $M = 5.55$ ネガ $M = 2.23$) やなじみ条件 (ポジ $M = 5.43$ ネガ $M = 2.16$) よりも弱かった。

対応しない特性

- ・ 友人記述における対応しない特性 4 つに対してポジティブ・ネガティブ別に平均値を算出し、教示 × ビデオの ANOVA を実施したが、有意な主効果、交互作用は見られなかった。これは今までの研究と同様、自発的特性転移が特性特定のであることを示している。

媒介要因の分析

ターゲットの同定

- ・ 研究 2 と同様、自発的特性転移に記憶違いが影響していないかを見るために、誰について述べたかの 6 点尺度の従属測度を自己、わからない、友人の 3 つに分割し、バイレンスも要因に入れて友人の記述に対して回帰分析を行った。交互作用は有意でなかったため、誤った記憶の影響は見られなかったといえる。

知覚された承認

- ・ 13~15 名の参加者を別に募り、各ビデオを見せた上で、それぞれの場面で伝達者ほどの程度記述内容の特性を承認していたかを 7 件法で回答させた。その結果、平均値は尺度の理論的中央値に近く ($M = 4.05, SD = .96$)、回帰分析に組み入れられた場合にも有意な結果をもたらさなかった ($t = 1.12, F(1, 169) = 2.15, p > .14$)。この要因が組み込まれたあとも、自発的特性転移の効果は減少しなかった。

信憑性

- ・ ビデオの信憑性評定は中程度 ($M = 3.52, SD = 1.65$) だった。回帰分析に組み入れられた場合も、バイレンスの効果を打ち消すことはできなかった ($F(1, 168) = 7.69, p < .007$)。自発的特性転移の効果は信憑性とは関係のないことが示された。

考察

- ・ 自発的特性転移が特性特定のことが再び示された。
- ・ また、知覚者の抱く目標は自発的特性転移に影響しなかった。この結果は自発的特性転移が実験室の外にも一般化されうることを示している。
- ・ 自発的特性転移の効果は自発的特性推論よりも弱かった。さらに、印象形成以外の目標は自発的特性推論を減少させる傾向にあったが、自発的特性転移に目標の効果は見られていなかったこと

から、自発的特性転移は単なる連合の問題であるという著者達のモデルは再び支持された。

- ・ 研究4では、自発的特性転移は記憶違い、特性の承認、信憑性とは関係ないことが示された。この結果は自発的特性転移の頑健性を示すものであると共に、自発的特性推論とは異なるプロセスをへていることも示唆している。

全体考察と結論

- ・ 本研究の結果、自発的特性転移が生じていることが示された。さらにこの現象がいくつかの単純なプロセスをへて生じていることが示された。
 - 研究1では伝達者が他人を記述するときには、特性が活性化し、伝達者が特性と連合されることが示された。残りの研究ではそれが伝達者自身の特性評定に影響することが示された。
 - 後の研究では、自発的特性転移がポジティブ・ネガティブといった全般的なものではなく、特性特定のことも示された。
- ・ 研究3では、自発的特性転移は特性推論で考えられているようなロジカルな帰属プロセス(Heider, 1958; Jones & Davis, 1965)を経ていないことが示された。
 - 伝達者と記述が単にランダムに組み合わせただけという教示は自発的特性転移に影響を与えなかった。
 - 研究4でも、ロジカルな推論プロセスに影響する要因が自発的特性転移には影響していないことがわかった。
 - この結果も自発的特性転移は単なる連合プロセスを経て生じるという著者達の主張と一貫
- ・ これらの要因(記憶違い、行為の否認)は自発的特性推論には影響していた。
 - 研究2と研究4では、自発的特性推論の効果サイズは自発的特性転移の効果サイズよりも大きいことが示されていた
 - 研究3でロジカルな推論基盤が失われたときにはこの違いは見られなかったことから、2つは異なるプロセスを経ていることが示唆される
- ・ 研究4ではより現実的な場面(ビデオ映像)を用いて自発的特性転移が検討された。この方法でも自発的特性転移は生じており、自発的特性転移は広くみられる連合プロセスであるといえる。
- ・ しかし、自発的特性転移がいつでも生じるとは限らない。この点については今後の検討が必要。
 - 既に何らかの性格特性をもっていると考えられている人については自発的特性転移は生じないかもしれない。このような事前知識は連合の影響をうわまわる可能性がある。
 - ただし、その事前知識が期待やバイアスのもととなって新しい情報の再生や解釈に影響する場合もあるので、自発的特性転移は起きると可能性も考えられる。
- ・ 本研究で示された自発的特性転移の頑健性は、実践的・理論的な展望を与える。
 - 実践的な意義としては、たとえば、ゴシップやその他の社会的対話は伝達者本人に驚くべき影響を与えるかもしれない。
 - また、自分をよく見せようとするときには、望ましい特性をもつ他人について話せばいいだけかもしれない。

- 聞き手に注意を喚起することもできる。
- 理論的には、本研究は、他者の印象はエピソード情報の検索や分析よりも既存の連合にもとづいて行われるという主張(Carlston, 1980; Lingle & Ostrom, 1979)に一致し、印象形成における単純な連合の影響を強調する。
 - Cialdini and deNicholas(1989)は“もっとも幼稚な形態の連合でさえ、観察者に強力な心理的影響を及ぼしうる”と述べている。自発的特性転移もその一種かもしれない。